

A newly written Original Scenario

Backdoor

ENSEMBLE STARS!!
Tsuoku Selection

CROSSROAD

Written by 日田

Backdoor

裏口から侵入する。

気分は映画とかに出てくる超かっこいい無法者（アウトロー）だ。

無数の罠を掻い潜り、銃とか乱射して敵を殺すぜ、バン！　バン！　バン！

思い知ったか！　全世界の馬鹿野郎ども！

俺が大神晃牙さまだ………！

「……………」

勝手口のそばで何かバイトっぽい金髪のチャライやつがゴミ袋をまとめつつ、勝手に入ってきて怪しい動きをしてる中坊を——俺を、びっくりした顔で見てやがった。

「あゝ、君さ——」

バイトくん（仮）はひたすら面倒くさそうな顔をして、手を差し出してくる。

「千円。入場料ね」

「あ、はい。すみません」

「次からはちゃんと入り口から入ってね」

バイトくん（仮）はそれ以上はお説教めいたことも言わずに、千円札と引き替えに変にお洒落なプラスチックのカードを渡してくる。それをカウンターに出せば飲み物ともかもらえるから云々。どうもご親切に。

「楽しんでってね〜♪」

そのまま勝手口から出て行くバイトくん（仮）を尻目に、俺はこの時点でもはや恥ずかしくて帰りがたかったが——気を取り直して店内へ向かう。

ここは後に俺が通うことになる夢ノ咲学院のそば、繁華街のなかにある安っぽい地下ラ
イブハウス。

ここが俺の神殿だ。

ここに俺の神さまがいるんだ。

* * *

俺が近ごろ入り浸ってる地下ライブハウスは、ちよつと変な構造になつてる。
普通の繁華街の路地裏に、地下に繋がる階段がある。

そこを降りると左右に伸びる通路があつて、いくつもの防音扉が並んでる。

そのほとんどはアマチュアバンドとかが借りて練習するための小部屋（ブース）で、普段はあんまり使われてないのか覗き窓から見ても無人なことが多い。

まあ今どき、みんな実際に楽器を手に持って指を痛めてギターの練習とかしねえよな。そういうのは最近では自宅で、パソコンと睨めっこしてポチポチやるんだろ。

知らねえけど。

そんなうら寂しい通路の果てに、従業員たちの控え室だの厨房だの、俺が侵入を試みて運悪く見つかった勝手口とかがある。

そんな勝手口、つまり裏口は地上に繋がってるし普段は誰もいねえから、最近ではギター入門書とか買って金欠な俺はそっちから忍びこんで入場料をケチってたんだが。

「次からは、同じ手は使えねえな」

俺はぼやきながら通路をすくすくと歩いて、目当ての防音扉に辿り着く。

通路の真ん中にある、いちばんデカくて豪華な扉。

その奥に、この店の中心——ライブハウスってか音楽ホールがある。

『♪♪♪♪♪』

重たい扉を開けると音のかたまりが全身を打つ。

これだよこれ。びりびりする。

そこそこ広い空間の奥にけっこう立派な舞台があつて、そこで店側に申請したバンドとかが演奏をする。

客はドリンク代も兼ねた入場料を支払い、追加で注文した飲み物とか食べ物とかを口に入れながらそんな演奏を楽しむ。

よくあるライブハウスだろ。知らねーけど。

俺は未成年だから当然、ノンアルコールのトマトジュースとかを飲みながら音楽に耳を傾ける。

ここは夢ノ咲学院が近いからか、客は何かだらしない感じの見た目の学生が多いし、こんな場末のライブハウスの客としては若い俺が浮くこともない。私服だしな。

店側も客層に配慮してんのか、酒や煙草の臭いはほとんどしない。

ひたすら、超かつこいい音楽だけが漂っている。

響いている。

『……………♪』

舞台の真ん中で、俺の神さまが熱唱している。

歌詞は英語でほとんど理解できない。たぶん世界の平和を願ったり、逆に神さまを冒瀆したり、何か小難しいけど意義深いことを歌い上げてるんだろう。

後に歌ってる本人に聞いてみたら、『かわゆい弟の風邪が治って嬉しい最高ハッピー！』

みたいな内容だったらしいが。アホかよ。うつとりしてた俺がアホだよ。でも。そんなことは何も知らない当時の俺は、純粹に感動していた。

舞台の上で光度を抑えられたスポットライトに照らされて、屍体みたいな青白い肌を闇のなかに浮かび上がらせた——あのひとに。

地獄の業火みたいな紅い瞳。

闇と溶けあい混ざりあう黒髪。

どんな色っぽい姉ちゃんよりも艶めかしい唇から吐きだされるのは、どこまでも男らしくて骨太な重低音。

世界を救う天使にも、逆に滅ぼす悪魔にも見えた。

どちらにせよ、あのひとの歌声には世界を簡単に塗り替えちゃうほどの威力があった。

『……………♪』

そんな俺が世界でいちばん尊敬してるひとの名前は、朔間零。

俺の神さま。

* * *

俺は平凡な環境で生まれ育った。

いわゆる中流家庭。父親はそれなりの年収のサラリーマンで、母親は今どきはわりと珍しいっぽい専業主婦。そこそこ良い土地に、そこそこ良い一軒家を買って暮らしてる。

両親はどっちも子供好きの世話好きで、俺はわりとちやほやされながら育った。

甘やかされてたお陰で、クソ我が儘で生意気なガキに育っちゃまった自覚はある。

欲しいものは何でも与えられた。

欲しいと思う前に与えられてきたから、自分が本当に欲しいものがわからなかった。

俺が育ってきて手の掛からない年齢になってきたら、両親は溢れるお世話欲(?)を満たすために犬を飼い始めた。

名前はレオン。最高の犬。

俺もそいつを猫かわいがりしたけど(犬だけど)、両親は俺の比じゃないやなかった。毎日毎日、たぶん赤ん坊や幼児のころの俺にも同じようにしてたんだろうな——と思わせる溺愛っぷりを見せた。

俺はちよつと、拗ねた。

両親の興味が、あからさまに俺からレオンに移ったのがわかったから。

レオンは悪くない。あいつは愛されるために買われてきた*。

そのために生まれてきた、血統書付きの、かわいがられるための犬だ。

あいつは本当によく出来た子で、俺が寂しがつてると寄り添ってきて、顔を舐めてくれた。寂しくないよって。

独りじゃないよって。

でも俺は、これまで与えられてきた愛情が露骨に目減りしたのを肌で感じて、不安になつちまつた。

——ああ情けない、甘つたれの大神晃牙くん！

でも俺は『犬なんかより俺を見てよ！』と主張できるほどには恥知らずではなく、レオンが愛されてることは俺が愛されるのと同じぐらい重要に思えたし——両親以外の、俺を愛してくれるものを求めて町をさまよつた。

俺は飢えていて渴いていた。

餌を求めてうろつく捨て犬みたいなもんだつた。

両親は悪くない。レオンも悪くない。たぶん俺だつて悪くないだろ。

義務教育はもう終わる。俺は自分で餌をとつて暮らす、一人前の年齢になつちまつた。だから俺は当然、そうするべきだつた。他のやつらもきつとそうしてる。

俺たちは親の庇護下から抜けて、思春期を乗り越えて、自分自身を獲得する。

自分自身の人生を。

そんな俺が何度も何度も馬鹿みたいな試行錯誤を繰り返した果てに、見つけたのが——
出会ったのが朔間零だった。

あのひとの音楽が、俺のからからに乾いてた魂を潤してくれた。

* * *

演奏が終わり、朔間零が舞台の奥に消える。

俺は舞台に立つたことがないから、どういう仕組みになつてるのかはよく知らない。たぶん何か奥のほうに、控え室とかに繋がる通路みたいなものがあるんだろうけど。

地下ライブハウスのなかは妙に暗くて見通しが悪いせいもあつて、朔間零がほんとお化けみたいに消えちまったように見える。

俺を潤して、満たしてくれるものが、消える。

だから俺はまた不安になつて、意味なくあちこち捜し回る。

朔間零を目当てに集まった連中の群れを掻き分けて、店内をうろろする。

——朔間零、朔間零、朔間零。

魂があのかつとを求めてる。

もちろん、俺はあのかつとの家族でも何でも無い。

友達どころか知りあいですら無い。

あのかつとはたぶん、俺を知らない。

それでも良かった。一方的に見つけて、出会って、好きになって憧れて満たされた。それだけで有り難かった。朔間零は俺をまちがいに救ってくれた。

それ以上を求めるつもりはなかった。俺はいまこの店に掃いて捨てるほどいるミーハーなファンのかつとで、俺にとつちや夜空みたいに遠いあのかつとのいる場所に辿り着けるなんて思ってた。なかった。

遠くから見ただけで良かった。

それはほんとの本心だ。それだけで充分、もらいすぎなぐらいだ。

それなのに。

「おつ、美味そうなんもんでる」

不意に、ノリで注文したものの皮に甘くて嫌になった俺のトマトジュースが入ったグラスを、誰かが横から取り去った。

——何だこの野郎。やんのかこの野郎。それは俺のだぞ。

喧嘩腰で睨め上げると、そこに朔間零がいた。

「飲まないならちようだい。歌ったら喉渴いちゃった」

当然、俺は硬直する。

朔間零がいる。

手を伸ばせば届くどころか、ほとんど密着してるといつていい距離だ。

当然、初心だった俺は有り得ない事態に驚きすぎて、気の利いた反応もできずにアホみたいに口を開けたまま硬直した。

「あれっ、どうした？　もしかして間接キッスとか恥ずかしいお年頃……?」

朔間零は何だか申し訳なさそうな顔をして、トンチンカンなことを言っていた。

「やだっ、ごめくん……。でも大丈夫、坊やの初めてを奪った責任はとる。うん」

それが、あまり誰にも自慢できない、俺とあのひとの初めての対話だった。

あのときから、今でもずっと、俺は傍若無人なあのひとに振り回されっぱなしだ。

* * *

裏口から踏みこむ。

今日もやる気なさそうにサボってスマホとか見てた金髪の店員——実はこの店の支配人で、おまけに夢ノ咲での俺の先輩らしい羽風とかいうチャラ男が、何かキモい顔でスマホを操作しながら俺を横目で見た。

「見て見て。新しい子の連絡先をゲットしちゃった。今、初メッセ中」

「うるせくな、知らねくよ。話しかけんじやねくよチャラ男」

あのおんまり思い出ししたくない朔間零——朔間先輩との初めての出会いから、二年ぐらいが経過している。

俺はすこしだけ背が伸びて遅しくなった。

必死に練習したから、ギターや歌もちよつとはましなレベルに達した。

俺がそうしてささやかな成長をしてるうちに、夢ノ咲はぐちゃぐちゃになつてた。

輝かしい歴史と伝統に彩られたアイドル養成学校、夢ノ咲学院。

その内実は腐つてた。

朔間先輩みたいになりたくて何も考えずに同じ道を辿り、夢ノ咲を受験した俺は、馬鹿だったって話だ。俺には何も見えてなかった。何もわかつてなかった。

夢ノ咲の生徒はクソばっかだ。そんなの、朔間先輩を目当てにこの地下ライブハウスに通い詰めるなかで、気付いてて当然だったのに。

死んだ目をした連中が、死臭の漂う薄暗い青春を過ごす、腐った箱庭。

朔間先輩はそんな環境でも妙に生き活きして見えたから、勘違いしちまった。ううん。俺は馬鹿で未熟なガキで、何も見えてなかったんだと思う。

死んだ目をしてたのは朔間先輩も同じだった。

あのひとは屍体の山のなかで、自分だけは死にたくても死ねずに、ひたすら何か面白いことが起きないかって祈ってた生ける屍だった。

誰もあのひとを救えなかった。

お寺からきた眼鏡の坊さんは、あのひとを人間以外の——人間以上の何かにしようとして怒りを買った。

迷いこんだ馬鹿な野良犬も、ひたすら餌をもらって喜んで尻尾を振ってただけだ。

俺たちは、常にへらへら笑って幸せそうに生きてたあのひとが、ほんとは誰よりも苦しんでいて痛切に助けを求めてたんだって——気付かなかった。

だつてさ、あのひとは楽しそうだったんだよ。

俺やクソ眼鏡といっしょに舞台上に上がつてるときは、俺たちが『デッドマンズ』とか名乗って気まぐれにちよつとだけ活動してた間は、本気で幸せそうに——生きてた。

でも。あれはほんの一瞬だけの、短い夢だった。

夢が終わり、魔法は解けて、あのひとは屍体に逆戻り。

腐った夢ノ咲を革命する。そう主張して動き始めた正義の味方きどりの連中に、朔間先輩は悪として退治された。

悪い魔物は倒されて、めでたしめでたし。

そうだよな。屍体が動くとかキモいよな。

キモい化けもんは退治しないと駄目だよな。

——クソ野郎どもが！

* * *

「わんちゃん、今日も歌ってくの？」

相変わらずスマホを弄りながら、チャラ男が興味なさそうに尋ねてくる。話しかけんなつつつてんだろ。

「空気悪くなるからやめてほしいんだけど。ほら君さ、朔間さんの手下みたいに思われているから——悪者の手下は悪者だからって、みんなに迫害され気味でしょ」

「どうでもいい。俺……俺様、は」

朔間先輩がたまに使っていた軽薄な一人称を口にして、俺は唸る。

あのひとが残していったものを、すこしでも抱き寄せて。

「俺様は、全力で歌いたいだけだ。他のやつらは関係ねーよ」

「店側としては困るんだってば。お客さんが君や朔間さんを馬鹿にして、君がキレて大乱闘とか——そういう事件が起こりそうでほんとに嫌」

「店には迷惑はかけねーよ、ちゃんとお行儀良くしとくよ」

「ほんととお？ でも君も他のお客さん——夢ノ咲の生徒と揉めそうだからって、こうしてトラブルを避けるために裏口から入ってくるわけでしょ？ 毎回？」

「ちゃんと使用料は払ってるだろ」

「そんな危険な橋を渡ってまで、何でわざわざうちの店で演奏すんのかって話。迷惑だなあ」
チャラ男はぼやきつつも、慣れた様子で鍵を取り出すとこつちに投げてきた。

「はい。一部屋、貸してあげるから衣装に着替えたりとかの準備して。トラブルさえ起こさないって誓ってくれるなら、わんちゃんさんは地味にうちの新たな稼ぎ頭だからね——」

実はわりと応援したいの俺、とチャラ男は軽薄に言って笑った。

その態度がむかつくので、俺は噛みつく。

「『わんちゃん』って呼ぶなよ」

「朔間さんには『わんこ』とか呼ばれてたじゃん。それに、俺が言う『わん』は『ナンバーワン』ってことだからね。ほんとほんと」

一瞬だけ真顔になって、チャラ男はそれを恥じて隠すように手をぴらぴら振った。

「朔間さんみたいな、俺の店でのナンバーワンの稼ぎ頭になってよ」

「テメーに、言われなくても」

俺は朔間先輩と同じような、この世界でいちばんの男になってやる。

歌うだけで大衆を沸かせて。流し目を送れば女どもが失神して。

目を見つめて話すだけで、どんな屈強な男どもも骨抜きにされて。

あつという間に魂を鷲掴みにされて、誰もが虜になっちまう。

そんな朔間零みたいな男に、俺もなる。道のりは遠すぎるけど。

「行くぜ。今夜も」

鍵を開けて小部屋（ブース）に飛びこみ、衣装に着替える。

俺の両親やレオンと同じぐらい大事な相棒、ギターを取り出す。

やることやって準備を済ませたら、舞台へ向かう。

正面から。

『震撼しやがれ愚民ども！ 俺様が本物の音楽つてもんを教えてやんよ！』

俺は歌う。ギターを掻き鳴らす。

かつての朔間先輩と同じように。

今は単なる猿真似でも、いつかあのひとと同じになれるようにと祈って。
今はもう、どこにいるかもわからないあのひとにも届くようにと願って。

* * *

昔、俺は飢えていて渴いていた。

朔間零に、音楽に出会って、そんな俺の魂は潤された。

——今度はこっちの番だ。

『Rock'n'roll……—』

来いよ、全世界のぼんくらども。

俺の音楽を聞かせてやる。

俺がおまえらの神さまになってやる。

あんさんぶるスターズ!!
選抜セレクション

クロスロード
CROSSROAD